アウグスティヌス『告白』の時間論に於ける過去と未来の対称性について

山田　庄太郎

『宗教学・比較思想学論集　第14号』抜刷
2013年3月　筑波大学宗教学・比較思想学研究会　発行

アウグスティヌス『告白』の時間論に於ける過去と未来の対称性について

山田 庄太郎

1．はじめに

本稿の目的は『告白』(ca. 400) 11 巻 14 章–28 章[1]のアウグスティヌス (354–430) の時間論に於いて、過去の時間と未来の時間の認識がどのようなものとして立てられているのかを明らかにすることにある。問題の所在を明らかにする為、ここで彼の議論の概略を確認しておきたい。

アウグスティヌスはこの一連の議論に於いて時間の計測の問題を主題化する。我々が計測することが出来るのは、存在しかつ何らかの広がりを有しているもののみである (Aug. *Conf.* 11, 21, 27)。然るに、過去と未来は存在せず、現在は寸分の広がりをも有していない。それ故、我々が長い短いという時間はどこに在るのか、時間の計測という日常的行為それ自体が一つの謎として立ち現れてくるのである (*Conf.* 11, 15, 18) [2]。

そこで彼は計測される時間を魂の内の印象 [affectio] に求める。我々が外界の運動[3]を認識する際、魂は自らの内にそれら運動の印象を形づくる (*Conf.* 11, 27, 36)。然るに運動の認識という行為は、その運動を認識し始め、続け、終えるという三つの相から成るのであるから、必然的に始点と終点とを有し、かつまたこの「より先」と「より後」の間、持続することになる。そしてその結果、我々が獲得するこれら運動の印象は、存在と広がりという計測される為に必要な二つの条件を満たすことになるのである。

このようにして彼は、我々が計測する対象を時間それ自体から我々の内的な印象へと移行させるが、単に時間を内面化するのみでは、時間の計測という難問に対する十分な回答とはなり得ないように思われる。というのも過去の出来事を認識することが常に原理的に可能であるのに対し、未来の出来事を認識することは、我々が時間的存在である限りに於いて、不可能であり、従ってまた、その印象を計測することも出来ないからである。ここには過去と未来の非対称性という問題が存在する。

それ故、以下の考察では、まず過去の時間を計測する場合を例として『告白』の時間計測モデルを明確化し、次いで未来の時間へのこのモデルの適用について論じることにしたい。

2．過去の印象

我々は時間そのものを認識し得ない[4]。我々が認識するのは時間の内で生じる可感的事物の運動のみであり、時間の経過はあたかもその影を通して知られるように、この運動を通して知られるに過ぎないのである[5]。実際、アウグスティヌスは次のように言う。

私の魂［animus］よ、お前の内で私は諸々の時間を計測する。……諸々の過ぎ去りいくものがお前の内に形づくり、それら［過ぎ去りいくもの］が過ぎ去ってしまった時にも留まっている、現前している印象それ自体［affectio ipsa praesens］を計測するのであり、過ぎ去ってしまってその結果［印象が］形成されるところのものを計測するのではない（*Conf.* 11, 27, 36）

事物の運動が常に過ぎ去り行くのに対し、印象は任意の機会に記憶によって今まさに我々の前に現前するものとして呼び起こされる[6]。それ故、未だ存在しない、あるいは既に存在しない事物の運動が計測し得ないものであるのに対し、印象は現前しているという正にその点に於いて計測され得るものとなる。

しかし現前していることそれのみで時間の計測の十分条件を満たすことは出来ない。なぜなら我々は一般に、それはこれよりも長く、これはそれよりも短い、あるいはこれとそれとは同じであるというように複数のものを比較考量することによってある時間を計測するからである[7]。そこで重要となるのが印象の複数性である。認識された一つの運度は、対応する一つの印象を魂の内に形づくることになるのだから、魂の内には認識された運動の数と同じだけの印象が存在することになる。そして、同時に形成されたものではないが記憶の下で我々の目の前に同時に現前するこれら複数の印象を比較考量することによって[8]、我々は時間の長短についての言明を行うことが可能となる。

実際アウグスティヌスによれば、長音節が短音節に対し二倍の長さを有することを我々が知るのは、我々の記憶の内の短音節の印象が一般に長音節の印象に比べて二分の一の量しか有していないからに他ならない（Cf. *Conf.* 11, 27, 35）。無論、短音節にせよ長音節にせよ、常に一定の長さで発音されるわけではないのであるから、こうした印象による比較は「時間の確固とした尺度［certa mensura temporis］」を保証するものではない（*Conf.* 11, 26, 33）[9]。とはいえ、これらの印象は、ある運動がその内で生起する時間が、他の運動がその内で生起する時間に対し、どれだけ長いか短いかを語る為の根拠として機能し得るのである[10]。

それ故「諸々の過去についての現前しているものとは記憶［memoria］」（*Conf.* 11, 20, 26）と言われるが、それはより厳密に言えば、「記憶する」（*Conf.* 11, 28, 37）力を持つ魂によって魂の内に刻まれ、折に触れ呼び起こされるこれらの印象を指しているのである[11]。

こうした『告白』の時間計測モデルは「ちょうど腕の広がりによって横木の広がりを我々が計測するように」「短い音節の広がりによって長い音節の広がりを計測」（*Conf.* 11, 26, 33）するというものであり、計測するものと計測されるものの両者が共に完結した一定の広がりを有しているということを前提としている[12]。実際、これら計測されるものとしての出来事［res］の印象は、「記憶の内に刻まれて留まっている何か」（*Conf.* 11, 27, 35）であり、記憶へと委ねられる為に発端と終極とを有していなければならず（*Conf.* 11, 27, 34: cf.　11, 24, 31）、完結性をその特徴とする。

無論、これは当の運動それ自体が完結していなければならないということを意味しているわけではない。「もし私が物体が動き始めてからを見ておらず、また動き続けていてその結果動き已む時を見ていないとしたならば、恐らく私が見るということを始めてか

らそれを止める迄の間を除いては私は時間を計測することが出来ないであろう」（*Conf.* 11, 24, 31）という彼の言葉は、ここで問題となっているのが認識行為の完了であることを示している。

３．過去と未来の非対称性と対称性

では、このような時間計測のモデルに於いて、未来の時間はどのように捉えられるのか。過去の出来事は、既に過ぎ去ったもの［praeteritum］として、一度存在し、その存在を終えたものであって、それ自体に於いて完結性を有しているだけでなく、我々によって認識されることが可能であったものである。その意味で『告白』の時間計測モデルは、記憶の内にその印象が存在し得る過去の出来事に対して最適化されたモデルであると言えよう。

それに対して、未来の出来事は、やがて存在するもの［futurum］として、未だ存在していないことを特徴としており、それ自体としての完結性を有し得ないというだけでなく、その印象を記憶の内に刻印する為に我々によって認識されることもまた原理上あり得ない。出来事［res］の次元では過去と未来の間には明確な非対称性が存在しており、この非対称性が未来に対し同一の計測モデルを適用するのを拒むのである。

しかしその一方で、確かに我々は日常に於いて未来についての何らかの言明を行う。そこでアウグスティヌスは、未来に関して、計測される未来の時間を未来の出来事の印象から、我々によって予測された未来の出来事の印象へと読み替える。なぜなら我々は「我々の未来の諸々の行為を予見［praemeditari］」し、「その予見［praemeditatio］は」まさに我々の前に「現前するものである」（*Conf.* 11, 18, 23）からである。彼はこうした予見の一例として、曙を見て太陽が昇るのを予告するという事態を挙げる。

> 私は曙を眺め、そして太陽が昇ることを予告する。私が眺めるところのものは現在であり、私が予告するところのものは未来である。……しかし……魂の内に私がその日の出を見るのでなければ、それを予め語ることは出来ないであろう。然るに、私が天にそれを見るところのかの曙は、日の出に先立つとはいえ、日の出ではなく、私の魂の内に在るかの心象［imaginatio］でもない。［曙と日の出の心象という］これら二つの現前が知覚されるのであり、その結果将来の日の出が［これら二つの現前によって］告げられることになる。……諸々の未来は……既に存在し見られる諸々の現前するものによって予め語ることが可能なのである。（*Conf.* 11, 18, 24）

『告白』はこうした心象がいかにして獲得されるかについて具体的に語っていない。唯一明確なのは「既に存在しているそれらの諸原因ないし諸々の徴」から「魂によって思い描かれた諸々の未来［futura … animo concepta］が予め語られる」という点である（ibid.）[13]。

未来を思い描くという魂のこの働きについてのより詳細な記述は、『告白』とほぼ同時期に執筆が開始された『三位一体論』（400–ca. 420）の内に見出される。この『三位一体論』に於いてアウグスティヌスは「三位一体のアナロギアを人間の経験の領域に求め、

その構造を開示することによって、人間の精神（mens humana）を三位一体なる神の直観にまで導こうと」（中川 1966, 23）[14]するのであるが、その際に考察の対象として取り上げられるのが人間の認識の構造である。即ち彼は、視覚や聴覚といった外的認識と、想起や思考といった内的認識の双方の内に、三一性の働きを見出そうとするのであり、これら外的認識と内的認識という二つの認識モデルに対し、分析的な考察を加えている。それ故、以下『三位一体論』を手がかりにして、我々の目下の関心事である未来の心象の獲得について、考えてみることにしたい。但し本題に入る前にまず、通常の感覚的認識についての同書の記述を確認しておく。

『三位一体論』でアウグスティヌスは、感覚的認識の例として、視覚による認識についての分析を行う[15]。それによれば、我々がある事物を見る時、そこには見られる当の事物［res］と、この感官による知覚を通して得られる視像［visio］、そして「見られているこの事物へと、それが見られている間、目の感覚を留め置くところの魂の注視［intentio animi］[16]」の三者が存在する（Aug. *Trin.* 11, 2, 2）。この魂の注視は、その後に「魂の意志［voluntas］」と言い直されており（*Trin.* 11, 2, 5）[17]。この注視ないし意志が感官を対象へと結びつける限りに於いて、視像は、見られた物体から「刻印され」、物体が取り除かれた後も「留まっている」（*Trin.* 11, 2, 3）のである。この「物体の像［imago］」（Trin. 11, 2, 5）は、「見られた事物から我々の感覚に刻印された印象［affectio］」（Trin. 11, 2, 4）に他ならない。そしてこの「似像［similitudo］」が「記憶の内に」留まる限りに於いて、我々は目の前に当の事物が存在しなくとも、「想起する魂のまなざし［acies recordantis animi］を意志［voluntas］が記憶へと向ける」その時にそれを想起することが出来るのである（*Trin.* 11, 3, 6）[18]。

先に見た過去の時間の計測モデルは、こうした感覚的認識の構造――感官による知覚とそれによる印象の獲得、そしてその印象の想起――に基礎を置くものであると言って良いだろう。

しかしまた我々は、単に知覚したものを想起するのみならず、知覚していないものをも思考する。我々の内には「身体の感覚を通して取り込まれ、かつまた何らかの仕方で記憶に注ぎ込まれた物体的な事物の表象［phantasia］」だけでなく、「未だ見られていないがそれらの表象から想像物［phantasma］が形成されることによって思考されるもの」が存在するのである（Trin. 9, 6, 10）[19]。我々は思考によって、既に見たカルタゴの城壁から未だ見たことのないアレクサンドリアの城壁を思い描き（ibid.; cf. ibid. 8, 6, 9）、また他者の語る自らが記憶していない事柄を理解する（*Trin.* 11, 8, 14）。アウグスティヌスはこの思考の働きを次のように描写している。

> また私は四本足の鳥を想起しないが[20]、これは私がそれを見なかったからである。しかし私は、私が見たことのある空を飛ぶものの形姿に対し、同じ様に私が見たことのある別の二本の足を結びつける限りに於いて、そのような表象を極めて容易に見出す。それ故、個々に知覚され我々が記憶するところのものを結合したものを我々が思考するという限りに於いて、我々は我々が記憶しなかったものを思考するように思われる。（*Trin.* 11, 10 , 17）

魂の注視――ないし魂の意志――は、感覚を可感的事物に結びつけることで感覚的表象を得るが、それと同様にして、思考のまなざしを記憶の内の表象に結び付けることで想像物を形成する[21]。思考は記憶の内に保存されている複数の感覚的表象を組み合わせることによって、未だ知覚していないものの内的な表象を作り上げるのである。このようにして思考によって得られる表象は特に想像物と呼ばれる[22]。

我々はこうした思考の働きによって未知のものをも自由に思い描くのであるが、しかしその一方で思考は記憶の内に自らの限界を有している[23]。

> 実際、未だ見ない色や物体の形、未だ聞いたことのない音、未だ味わったことのない味、嗅いだことのない匂い、未だ触れたことのない何らかの物体の触覚を、誰も全く思考することは出来ない。……もし誰も知覚したもの以外には何も物体的なものを思考することが出来ないのであれば、知覚したもの以外には何も物体的なものを記憶しないのであるから、知覚の限度が諸々の物体の内にあるのと同様に、記憶の内に思考することの限度［cogitandi modus］が存在することになろう。というのも、感覚は我々が知覚するその物体から形姿を受け取り、記憶は感覚から、そしてまた思考する人の［魂の］まなざしは記憶から、この形姿を受け取るのである。（*Trin.* 11, 8, 14）

思考は、感覚的な表象をいわば素材として用いる限りに於いて、本質的に記憶によって限界づけられている。事実、「我々は我々が記憶しているものかあるいは我々が記憶しているものに由来するもの以外にはいかなる物体的なものをも思考することはない」（*Trin.* 11, 10 , 17）のであり、その意味で思考は記憶の延長であると言えよう[24]。そして我々の目下の関心事である未来の予測もまた、こうした思考の働きにその基礎を置くのである。実際、『三位一体論』では明確に「我々は……諸々の過去のものから諸々の未来のものを、思考によって推測する」（*Trin.* 15, 7, 13）[25]と述べられている。

こうした『三位一体論』の議論は、『告白』11 巻の時間論の解釈に於いて非常に重要な意味を持つ。確かに我々は、未来の時間に対して、厳密な意味に於いては過去の時間と同様の時間計測モデルを適用することが出来ない。しかしその一方で、我々は思考によって、それまでに知覚された過去の表象から未来の出来事についての表象、即ち想像物を作り上げるのであり、この仮想的な未来は厳密な意味での未来ではないが、ある一定の幅を持った計測され得る印象として魂の内に存在するのである。従って『告白』が「諸々の未来についての現前しているものとは期待［expectatio］である」と言う時、それは未来について思考する我々の行為――即ち期待――から得られるこれらの想像物を意味しているのである。

ここで注目すべきは『告白』の時間計測モデルに於ける過去と未来の対称性である。計測される過去の時間は、記憶に刻印された過去の出来事についての印象であり、計測される未来の時間、即ち期待、はこれら記憶の内の印象に由来する。期待の根底には記憶が存在するのであり、思考の限度が記憶によって定められている限りで、期待は記憶へと還元されるのである[26]。

従って過去と未来の非対称性は、『告白』の時間計測モデルに於いては捨象されている

と言ってよい[27]。むしろ計測されるものとしての過去と未来の時間との間には、記憶の内の印象としての、対称性が存在するのである。

4．まとめ

最後にここまでの考察を簡潔にまとめた上で、そこから得られる展望について簡単な言及を加えておきたい。

『告白』の時間計測モデルは、いわば時間の影としての事物の運動の印象から時間を間接的に計測するというものである。ここで注意すべきは、我々は事物の運動それ自体を計測するわけではないという点である。未来の事物の運動、即ち何らかの未来の出来事それ自体は、未だ存在せず、その限りで過去に対する非対称性を有している。事物の運動は時間の影である。しかしその事物の運動はさらにそれ自体の影を我々の内に形づくる。我々は記憶によって過去の印象を、期待によって未来の印象を現前するものとして見るのであり、この影の影によって、我々は過去と未来の時間を計測するのである。

過去の時間の計測と未来の時間の計測は、『告白』に於いて本質的に対称的な構造の下で理解される。そしてこの過去と未来の対称性は、間接的に現在の非対称性を際立たせることになる。

実際、アウグスティヌスは『告白』に於いて、「諸々の過去についての現在しているもの」としての記憶と「諸々の未来についての現在しているもの」としての期待と並んで、「諸々の現在についての現前しているものは直視［contuitus］である」と述べている（*Conf.* 11, 20, 26）が、この直視は決して計測されるような印象ではあり得ないのである。

『告白』の時間計測モデルは、事物の印象から間接的に時間を計測するというものであった。それに対して、外界の時間軸上の現在は、「極小の瞬間という部分にも分かちえない」ものであり、「どのようなわずかな間隔［morula］にも広がっていない」（*Conf.* 11, 15, 20）、点的な性格を有している。現在が持つこの点的な性格は、事物の何らかの運動がこの現在の内で生起するということを許容しない。事実、もし何らかの運動が現在の内で生じたとしたら、その一方は過去に他方は未来に分割され、この分割は無限に続くことになり、不合理に陥ることになろう。そして運動のない所にはその印象もまた存在しないのであるから、我々は印象を基に現在の時間を計測することが出来ないのである。それ故、アウグスティヌスは「我々は長い時間や短い時間と言うが、過去か未来についてでなければこのように言うことはない」（*Conf.* 11, 15, 18）として、計測される時間を過去と未来とに限定している。

ではこの「諸々の現在についての現前しているもの」とは何か。注目すべきは、彼が直視［contuitus］の語を『告白』に於いて注視［intentio］と言い換えている点である（*Conf.* 11, 27, 36）[28]。既に見たように『三位一体論』で注視は、魂の意志とも呼ばれ、感官や思考のまなざしを対象へと結びつける役割を付与されている。この『三位一体論』の記述を踏まえるならば、『告白』の直視は記憶と期待の両者を成り立たしめるものと解されよう。直視／注視の持つこの働きが『告白』の時間論の中でどのような意味を持つことになるのか、この点については稿を改めて論じることにしたい。

【略号】

著作からの引用に際しては既存邦訳を参考に適宜改変を施してある。

Aug.: Augustinus（アウグスティヌス）

Conf.: *Confessiones*（『告白』）

O'Donnell, James J., *Augustine: Confessions*, 3 vols., Oxford: Clarendon Press, 1992.

Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de saint Augustin (=BA) 13–14, *Les Confessions*, texte de l'édition de M. Skutella, intr. et notes A. Solignac, trad. E. Tréhorel et G. Bouissou, Paris: Desclée de Brouwer (=DDB), 1962.

「告白」山田晶訳、山田晶編『アウグスティヌス』（世界の名著 14）中央公論社、1968 年。

『告白』上下巻、服部栄次郎訳、岩波文庫、改訳版 1976 年。

『告白録』上下巻（アウグスティヌス著作集 5/1–2）宮谷宣史訳、教文館、1993–2007 年。

CD: *De civitate Dei*（『神の国』）

BA 33–37, *La Cité de Dieu*, texte de la 4e édition de B. Dombart et A. Kalb, intr. et notes G. Bardy, trad. G. Combès, Paris : DDB, 1955–1960.

『神の国』全 5 巻（アウグスティヌス著作集 11–15）赤木善光他訳、教文館、1980-1983 年。

GL: *De genesi ad litteram*（『創世記逐語注解』）

BA 49, *La Genèse au sens littéral*, intr. trad. et notes P. Agaësse et A. Solignac, Paris : DDB, 1972

「創世記逐語注解」『創世記注解 1–2』（アウグスティヌス著作集 16–17）片柳栄一訳、教文館、1994–1999 年。

Retract.: *Retractationes*（『再考録』）

BA 12, *Les Révisions*, texte de l'édition bénédictine, intr. trad. et notes G. Bardy, Paris: DDB, 1950.

Trin. : De Trinitate

BA15–16, *La Trinité,* I. Livres I–VII, texte de l'édition bénédictine, trad. et notes M. Mellet et Th. Camelot, intr. E. Hendrikx, II. Livres VIII–XV, texte de l'édition bénédictine, trad. P. Agaësse, notes P. Agaësse et J. Moingt, DDB, Paris, 1955.

『三位一体』（アウグスティヌス著作集 28）泉治典訳、教文館、2004 年。

Ar.: Aristoteles（アリストテレス）

Phys.: Physica（『自然学』）

Oxford Classical Texts, *Aristotelis Physica*, ed. W. D. Ross, Oxford: Clarendon Press, reprint. 2009 [1950].

『自然学』（アリストテレス全集 3）出隆、岩崎允胤訳、岩波書店、1968 年。

【参考文献】

BIPM 2006　Bureau International des Poids et Mesures (=BIPM) éd., *Le Système international d'unités (SI)*, Sèvres: BIPM, 8e éd. [http://www.bipm.org/utils/common/pdf/si_brochure_8.pdf]（翻訳として、国際度量衡局編『国際文書第 8 版（2006 年）国際単位系（SI）日本語版』独立行政法人産業技術総合研究所計量標準総合センター訳 [http://www.nmij.jp/library/units/si/R8/SI8J.pdf] を参照）2013 年 2 月 6 日閲覧

O'Daly, Gerard J. P. 1987　*Augustine's Philosophy of Mind*, London: Duckworth.
Quinn, John M. 1992　"Four Faces of Time in Augustine," *Recherches Augustiniennes*, vol. 26, pp. 181–231.
カイザー, H.J. 1990　『アウグスティヌス――時間と記憶――』小阪康治訳、新地書房。
中川秀恭 1966　「アウグスティヌスの『三位一体論』について（再論）」『北海道大学文学部紀要』15(1), 21–48 頁。
フッサール, E. 1967　『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳、みすず書房。（原書は 1928 年に出版: Edmund Husserl, *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, herausgegeben von Martin Heidegger, Halle a.d. S. : M. Niemeyer, 1928）
山田庄太郎 2010　「アウグスティヌス『告白』11 巻における時間の計測の問題――セクストス・エンペイリコスの議論との比較から――」『中世思想研究』52 号、33–48 頁。
―― 2012　「アウグスティヌス『告白』の時間論が有する諸特徴について――アリストテレス、プロティノスとの比較から――」『中世思想研究』54 号、35–52 頁。

【註】

[1] この範囲設定はフッサール（1967）に拠る。本稿では仮設的な枠組みとして、この定義を採用した。

[2] アウグスティヌスの議論が時間それ自体についてではなく、時間の計測の問題をその直接の対象としていることに関しては O'Daly （1987, 153–154）ならびに山田（2010）を参照。また、この『告白』の議論は先行するヘレニズム哲学の議論を下敷きにしている。ヘレニズム哲学からの継承とアウグスティヌスの独自性という問題に関しては、山田（2012）を参照。

[3] ここでは静止をも含めた広義の意味で運動の語を用いる。アウグスティヌスは物体の運動のみならず、静止をも時間によって計測するとしている（*Conf.* 11, 24, 31）。

[4] それ故、アリストテレスは我々にとって最も可知的なものとしての「今」に時間認識の成立根拠を置くのであり（Ar. *Phys.* 4, 11, 219b28–31）、この「今」は時間の部分ではないとされる（Ar. Phys. 4, 10, 218a6–8）。

[5] Cf. Quinn 1992, 184–187.

[6] たとえば自らの「少年時代［pueritia］について想起し物語る時、私はその像［imago］を現前する時間の内に見出すのであり、これはそれが未だ私の記憶の内に在るということに拠る」（*Conf.* 11, 18, 23）のである。

[7] たとえば現代の我々は、秒という時間基準［time standard］を介して、二つの運動を比較し、時間を計測する。現在、1 秒は「セシウム 133 の原子の基底状態の二つの超微細構造準位の間の遷移に対応する放射の周期の 9,192,631,770 倍の継続時間」（BIPM 2006, 2.1.1.3）として定義される。従って運動 X が完了するまでに 1 秒の時間を計測したと主張することは、この運動 X とセシウム 133 原子の放射とを比較することに他ならない。以前のように秒を平均太陽日の 1/86,400 倍として定義する（ibid.）としても、あるいはある種の水時計のように別の時間基準を用いるとしても、運動にかかった時間を計測する為には、計測される当の運動（あるいはアウグスティヌスのように運動の印象）と何らかの時間基準（時間の尺度）とを比較することが必要になる。

[8] 「我々がどれくらい長いかと言う時には、比較［conlatio］によってそれを言うのである」（*Conf.* 11, 24, 31）。

[9] 但しアウグスティヌスは年月日時といった慣習的な時間の単位を認めており（Aug. *CD* 12, 16; *GL* 2, 14,

29)、慣習上これらが時間基準[time standard]として振舞うことを許容しているように思われる。Cf. Quinn 1992, 192–194.

[10] それ故、『告白』では我々は時間が長いということを「ただ時間的感覚によってのみ」知るとされる（*Conf.* 11, 25, 32)。

[11] 「私は太陽の心象について語り、この心象は私の記憶の下に存在するのであり……心象は想起する私の前に存在する nomino imaginem solis, et haec adest in memoria mea ... ipsa [=imago] mihi reminiscenti praesto est」（*Conf.* 10, 15, 23)。

[12] 空間的長さの計測と時間の長さの計測をアウグスティヌスは区別しているように思われる（*Conf.* 11, 26, 33)。両者の相違点は、前者が現に今存在しているのに対し、後者が既に存在していない、あるいは未だ存在していないという点にある。

[13] 「諸々の未来の神秘的な予見は、それがいかなるものであろうと、存在するのでなければ見られることは出来ない。然るに既に存在しているものは、未来ではなく現在である。それ故、未来が見られると言われる時には、未だ存在しないそれらのもの、即ち未来であるところのものが見られるのではなく、恐らくむしろ既に存在しているそれらの諸原因ないし諸々の徴が見られるのである。従って、未来ではなく現在が、[未来を]見る人々の下に既に在るのであり、そこから魂によって思い描かれた未来が予め語られるのである。そしてこれら思い描かれたもの［conceptiones］は既に存在するのであり、これを予め語る者達は自らの下に現前するこれらのものを見出すのである」（*Conf.* 11, 18, 24)。

[14] 中川（1966）によれば、『三位一体論』は「聖書に基づいて三位一体を述べ」「それをドグマの形式にととのえる」1–7 巻と、三位一体のアナロギアを求め人間の精神を神の直観にまで導こうとする 8–15 巻の二つの部分から成る。本稿で取り上げる認識の問題は、同書後半部で扱われている。

[15] アウグスティヌスは感覚を、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触角の 5 つに分類する。特に視覚を例として採り上げる理由として彼は、それが「物体的感覚の内で最も卓越しており、精神の見る力［visio mentis］に……より近い」（*Trin.* 11, 1, 1）ことを挙げている。

[16] この精神の注視［intentio animi］はまた「我々が見ているその事物へと感覚を向け、両者［i.e.事物と感覚］を結びつけるもの」と言われている（*Trin.* 11, 2, 2)。

[17] “Quae cum ita sint, tria haec quamvis diversa natura, quemadmodum in quamdam unitatem contemperentur meminerimus ; id est, species corporis quae videtur, et impressa ejus imago sensui quod est visio sensusve formatus, et voluntas animi quae rei sensibili sensum admovet, in eoque ipsam visionem tenet.”

[18] 想起は、対象としての記憶と、想起される似像、想起する魂のまなざしの三者から成る（*Trin.* 11, 3, 6)。

[19] “Unde etiam phantasias rerum corporalium per corporis sensum haustas, et quodam modo infusas memoriae, ex quibus etiam ea quae non visa sunt, ficto phantasmate cogitantur, sive aliter quam sunt, sive fortuitu sicuti sunt, aliis omnino regulis supra mentem nostram incommutabiliter manentibus, vel approbare apud nosmetipsos, vel improbare convicimur, cum recte aliquid approbamus aut improbamus.”

[20] この「四本足の鳥［avis]」に関して、アウグスティヌスは『再考録』で、「レビ記」11:20–23 に四本足の有翼動物［volucris］（昆虫）が記されていることに気づかなかったと「訂正」を加えているが、彼自身このことがこの箇所の論旨を損なうものとは考えていない（Aug. *Retract.* 2, 15, 2)。

[21] 「意志は感覚を物体に結びつけるのと同様に、記憶を感覚へと結びつけ、思考する者のまなざしを記憶に結びつける」（*Trin.* 11, 8, 15）

[22] 他の多くの場合と同様に、魂の内の事物の印象［affectio］を巡るアウグスティヌスの用語法は必ずしも一貫していない。印象の語は像［imago］や似像［similitudo］と容易に置換される。また表象［phantasia］と呼ばれる場合は主として感覚的な事物の印象を指す為に用いられるが、必ずしも常にそうであるわけではない。但し想像物［phantasma］の語は一貫して思考の結果として得られる表象に対して用いられているように思われる。O'Daly (1987, 107) は、アウグスティヌスがストア派に於ける phantasia と phantasma の区別を彼自身の技術上の目的の為に採用したと指摘している。

[23] 「このようにして、物体的なものについて思考する人は皆、……過去について語るものにせよ、未来について予告するものにせよ、そうしたものを聞いたり読んだりした時に、自らの記憶へと立ち戻り、この思考する人が見つめるあらゆる形姿の限度［modus］と尺度［mensura］をそこで手に入れることとなる」（*Trin.* 11, 8, 14）。

[24] 我々は『告白』の内に、こうした『三位一体論』に於ける思考の働きについての解釈と同様のものを見出すことが出来る。但し『告白』の記述はかなり概略的なものに留まる。「記憶の内に乱雑に含まれていたものが、あたかも寄せ集めるようにして思考することによって、また管理するようにして注意を向けること［animaduertendo］によって、以前は散乱し顧みられていなかったものを隠し持っていた記憶の内に、いわば手近に置くようにして、既にそれに精通している注視［iam familialis intentio］の下に容易に現れることになる」（*Conf.* 10, 11, 18）。

[25] この引用の直前には「……我々は、今は不在であるがかつて存在していた諸々のもの、そしてまた我々が忘れていない諸々のものを記憶を通して知る」（Trin. 15, 7, 13）と言われている。我々はここから『告白』に於ける時間についての考察が『三位一体論』に反映していることを知ることが出来よう。

[26] 『告白』の時間論の根底に記憶の働きがあることを指摘したのはカイザー（1990）である。カイザーの研究は非常に有益なものであるが、記憶の持つ根底的な働きを現在にも適用する点で誤っている。

[27] 無論このことは時間軸上の過去と未来とに関するこの問題にアウグスティヌスが無関心であったということを意味しない。

[28] contuitus の語は『告白』に於いて intentio の他に attentio とも言い換えられ（Conf. 11, 28, 37）、動詞としては adtendere の語が用いられる（ibid.）。

（やまだ・しょうたろう　筑波大学人文社会科学研究科　哲学・思想専攻
／日本学術振興会特別研究員 DC）